



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



「批判的思考力」を高めるための大規模クラスでの アクティブ・ラーニングの試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): Active learning, Critical thinking, Deep learning 作成者: 松本, ますみ メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009826

「批判的思考力」を高めるための大規模クラスでの アクティブ・ラーニングの試み

松本 ますみ*1

A Trial of Active Learning in a Big Class for the Improvement of Critical Thinking Ability

Masumi MATSUMOTO

(原稿受付日 平成 30 年 12 月 19 日 論文受理日 平成 31 年 2 月 1 日)

Abstract

In order to develop students' critical thinking ability, the writer introduced a methodology in the big class of the "Introduction of Philosophy A" for the first year undergraduate students. In the methodology, the writer circulated a worksheet to ask students a question, which was closely related to the dilemma that students might face very often. The students were required to write their opinions three times. The second and third ones were written in response to anonymous classmates' opinions. In many cases, students changed their opinions after reading other students' descriptions. Some students strengthened their own opinion after reading the similar ideas. This was the procedure to listen to others' opinions and deepen their own thought. The writer's role was only a facilitator to help students to think more profoundly. In this paper, I will argue the details of this methodology, students' reactions and some problems that should be resolved.

Keywords : Active learning, Critical thinking, Deep learning

はじめに

筆者は 2014 年から室蘭工業大学副専攻共通科目中の導入科目「哲学入門 A」(後期 90 分 8 回、履修者のほとんどは 1 年生)を担当している。履修者は年度によって異なるが、全部で 70 名から 180 名程度で推移している。150 名以上収容の大教室を使い、学生は 3 人掛の固定椅子と机に 3 人座るということで学生は身動きすることも難しい。

そこで、2015 年度から、アクティブ・ラーニングの一環として、「クリティカル・シンキング」ワーキング・シートを配って匿名で紙上議論するという方法を取り入れている。この方法を使うことにより、学生は他の

*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

同世代の学生のさまざまな忌憚なき意見を読みながら、自分の意見を書き、思考を深めることができる。

本論では、第一に〔菊池 2016〕が導入した、クリティカル・シンキングのためのワーキング・シートを使っている授業の実践、第二に、学生の反応、第三に、その問題点について、学生のアンケートと毎回のミニット・ペーパーの結果を使いながら報告をしていくことにする。

1 クリティカル・シンキングのワーキング・シートの導入

1.1 クリティカル・シンキングのワーキング・シート導入のきっかけ

筆者の専門は、マイノリティ論で、特に中国の「上から」と「下から」の国民統合の問題点やムスリム少数民族の歴史および反差別運動/行動の実態についての論考を多く書き、発表してきた。国民統合や少数者の尊重、差別の解消というテーマはすぐれて西欧政治哲学と深い関連がある。それは、近代国民国家の誕生や、自然権、人権概念の確立と制度的運用、さらには戦後国際における国連の役割がおおいに関連する。そんな筆者が、室蘭工業大学（以下、本学）の副専攻共通科目中の「導入科目」（学部1年生向け）の一科目である「哲学入門 A」において次項で詳述するようなクリティカル・シンキングのワーキング・シートを導入しようと考えたきっかけは、以下のとおり3つある。

第一の理由は、理系大学の特殊性をかんがみた時間的制約である。長い歴史と深淵な内容をもつ哲学、特に西欧政治哲学のアウトラインを教えるためには、8回（実質7回、90分、1単位、最後の1回は期末試験）の授業では不足である。また、後期の前半8週の「哲学入門 A」と後半8週の「哲学入門 B」で連続して、西欧政治哲学を教えるにしても、学生が大幅に入れ替わるので、思想の連続性を語る事が難しい。そこで、「哲学入門 A」では、自らの生活史や大学生活の問題点、近未来の職業や直近の「人口問題」「労働問題」「生命倫理」「環境問題」にかかわる社会問題を学生と一緒に考え、議論することにした。

ここで本学の事情を少し説明したい。本学は、工学部だけの単科大学（2019年度から「理工学部」に改組予定）である。入学者は1学年600人程度である。共通基礎科目の「導入科目」に含まれる、1単位講義科目は、他の総合大学ではあまり見られないものである。しかし、工学部である本学のカリキュラムでは「導入科目」中に1単位科目が10科目ある。例示すれば、「哲学入門 A」（前半）と「経済のしくみ B」（後半）という組み合わせ、または、「西洋の歴史」（前半）と「哲学入門 B」（後半）、あるいは、「西洋の歴史」（前半）と「こころの科学」（後半）というような組み合わせがありうる。1年生後期の前半8週と後半8週に全く違うディシプリンの科目を履修することが推奨されている。換言すれば、工学部の初年次では、特に「専門外」と思われる人文社会科学系科目に関しては、できるだけ「広く・浅く」さまざまな共通科目を学んでほしい、という大学のカリキュラム・ポリシーが見え隠れする。例外は英語科目である。ちなみに、「哲学入門 A」「哲学入門 B」は連続して合計16週履修することができるが、そのパーセンテージは毎年15%前後で推移している。

そこで、授業計画としては、「哲学入門 A」はグローバル化と効率化・合理化、QOLといった概念を、学生たちの身近な問題として批判的に捉えることを目標とした。一方で、「哲学入門 B」では、ギリシア哲学から始まる西欧哲学史概説を扱うことにした。後者では、どちらかという公務員試験対策のような従来型の一般教養科目を念頭に、グループワークを取り入れながら、哲学のさまざまな概念を習得し、思考方式をなぞることを目標とした。

第二に、「哲学」科目と本学の工学部という学部専門の連続性の希薄性である。本学は工学部だけの単科大学であるので、人文社会科学系、特に思想/歴史関係の専門に進むものはほぼ皆無であろうことが予想される。また、学生の中からは、少数ながら、苦勞して受験勉強をして大学生になったのに1年次では専門を教えてくれない、高校の復習のような科目も多く、そして、友人も作りにくく、その結果大学に満足できない、つまらない、という声も聞こえる。

だからこそ、それを逆手にとり、共通科目において、学生が高校時代までは経験していないであろうアクティブ・ラーニングを取り入れ、一人ひとりが「深く考える」「深く理解する」「他者と対話する」習慣をつけるという必要性を強調する必要があると筆者は考えた。深い理解とは、共感をもって自己認識し、それによ

って探究的な知識活動を増進させるという目的をもつ〔亀倉 2018 : 97〕。一方、現代学生は、「人よりもよい点数を取ることを目標にする受験勉強直後は、他者と協調したり、議論を深めたりしながら「シリアスな問題」に介入することを嫌う傾向がある。それゆえ、あえて「哲学」の問題に絡めながら、「シリアスな問題」の解決に他者と議論することで取り組んでほしいと考えた。議論型授業は、文系理系問わず、将来の職業に役立つという調査結果もある〔豊永 2018 : 99-101〕。

第三に、学生を書く能力の向上をもくろんだからである。昨今の学生は、ここ 5、6 年の急速なスマートフォン（iPhone の発売は 2007 年）の普及も関係しているのであろうが、「論理的に書く」ことが苦手な傾向がある。その理由を探してみよう。まず、1) スマートフォン依存である。本学の 1 年生 67 人にアンケートをとったところ、55 人が 1 日 5 時間以上スマートフォンを触っており、平均 5 時間半（330 分）触れていることがわかった。また 55 人の内 25 人が「スマートフォン依存症」であるという自覚がない。また、その内訳は、調べ物や連絡が、1 割に過ぎず、その他、ゲーム、Youtube、SNS（LINE、Instagram、Facebook）など、いわゆる暇つぶしが 9 割という結果である¹。特に SNS では、交わす文章一文一文は短いものであり、長い内容を論理的に書く習慣がつかない。ちなみに、2014 年の総務省による統計は 20 代で 180 分となっているので²、本学の 1 年生学生のスマートフォン依存がことさら高いことがわかる。

さらに、2) 読書習慣の欠如である。本学の学生は工学部の所属であるからという理由もあろうが、読書習慣が極端に少ない。筆者が 2018 年後期に担当した 1 年生のクラス「表現技法」において、18 名中、「読書が好き」とアンケートに答えた学生は 3 名に過ぎない。その内訳は、「ライトノベル」、「マンガ」、「探偵小説」である。学生全員に図書館で借りた本を 30 秒でプレゼンテーションをする、という課題を与えると、選んできた本は、図や表が多いコンピュータ・マニュアル本や図鑑、英語科目の薄い課題図書（多く、英語初習者向けリトルド・ストーリー）が過半数である。また、ここでも、本学の学生の傾向として、母語の書籍を一冊読み通すという習慣が少ないことが裏付けられている。

現に、本学の学生は、1 ヶ月にほとんど本を読まない学生が 58%、1 冊が 23%、2 冊が 9%、3 冊が 4%、5 冊以上が 4%となっている³。これは、全国大学生協連が全国の大学生を調査して分かった、本をほとんど読まない学生 53.1%（文系 48.1%、理系 54.1%）を上回る数値である。これは、大学入学前に読書習慣がつかなかった学生が多いからとも考えられる⁴。読む能力と、書く能力は密接に関連していることが実証的に裏付けられている〔猪原 et.al. 2015〕。

第四に、授業時間が昼過ぎの 12:55 からの 90 分間に設定されていることである。言うまでもなく、学生が生理的に一番眠くなる時間である。目を覚まして授業に参加してもらうためには、作業を伴うアクティブ・ラーニングが一番よい。もちろん、グループワークも効果的であるが、中には、熟睡していたり、意図的に参加を拒否したりするものも少数ながらいる。そこで、全員が参加しないと、ワーキング・シートの数が物理的に足りなくなるクリティカル・シンキングの紙上対話を行うことを考えた。

このように、論理的に「書く」習慣に欠け、読書や新聞を含めた「読む」ことも少なく、どちらかというところシリアスな問題について他者と対話も行ったこともない学生に、考える習慣を授業内でつけることを意識的に考えた結果が、クリティカル・シンキングのワーキング・シートの導入であった⁵。さらには、昨今の「文理融合」、「リベラル・アーツ教育への回帰」の風潮の中で〔隠岐 2018 : 202-210〕、総合的にものをみる視覚（パースペクティブ）を養ってほしいとも考えたからである。

¹ 松本ますみ 担当「表現技法 A」における 1 年生学生 4 人によるアンケート調査の発表会資料（2018 年 11 月 21 日、室蘭工業大学 C206 教室）

² 平成 29 年「情報通信白書」<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc111120.html>（2018 年 11 月 29 日アクセス）

³ 『北海道新聞』2018 年 3 月 30 日

⁴ 『北海道新聞』2018 年 2 月 18 日

⁵ なお、「書く」練習は、このクリティカル・シンキング・シート以外に、A5 のミニット・ペーパーを使って、毎回授業内で行っている。試験は 8 週目なので、ミニット・ペーパーは出席カードをかねて、毎回書くことになる。一回分 6 点として、42 点分がミニット・ペーパー分の配点、最終回の論述試験が 58 点満点となる。

1.2 クリティカル・シンキングの先行研究・先行施行

さて、さまざまな大学の哲学担当教員が「クリティカル・シンキング」の手法を取り入れて授業を行っている。哲学を学ぶということは「思考のスキルを身につけること」〔伊勢田 2005：9〕であり、クリティカル・シンキングとは「ある意見を鵜呑みにせずよく吟味する・・・批判的思考法」〔伊勢田 2005:11〕であると同時に、「適切な規準や論拠に基づく、論理的で、偏りのない思考」〔ゼックミスタ et al. 訳者注 1996：4〕であるといえよう。また、「哲学カフェ」の最近の隆盛からもわかるように、哲学とは「問い、考えて、語り、聴いて」自由を得ることであり、その自由とは、「共に考え」「共に生きる」「他の人と一緒に求める」こと〔梶谷 2018：15、17、34〕との再定義もある。「哲学カフェ」の場合、発言の自由、他者の尊重、複数の回答の尊重、意見を変えてもいい〔梶谷 2018：46-47〕等の原則が尊重されていることからわかる。

さて、ゼックミスタはクリティカル・シンキングには、次の3つの要素が含まれるとする。すなわち、

- ①問題に対して注意深く観察し、じっくり考えようとする態度
- ②論理的な探究法や推論の方法に関する知識
- ③それらの方法を適用する技術

この中で、一番重要なのは、①である。じっくり聴き、考えようとする態度こそが、なによりも重要となる〔ゼックミスタ et al. 訳者注 1996：5-7〕。先行研究では、これを科学技術の問題の議論に関連させて演習問題を提示して、さまざまな教育機関で実用に付している〔伊勢山、戸田山 et.al.2013〕。また、菊池は、哲学科目を医科大学で教える中で、クリティカル・シンキングに関しては、「知」「合理性」「多様性」「規範」「苦楽」「環境」について論じるのが適しているとも述べる〔菊池 2018〕。

2 クリティカル・シンキングの課題の実際

2.1 講義との連動と課題

さて、「哲学入門 A」では、都合3回のクリティカル・シンキングのためのワーキング・シートを配布して、匿名で意見を書いてもらった。このシートは、菊池建至が、金沢医科大学で用いているものを参考に本学にふさわしい形に応用したものである⁶。ちなみに、本学でクリティカル・シンキングを行う日の「哲学入門 A」の90分間の授業の時間配分は以下の通りである。

- ①10分 先週の復習、学生の意見へのフィードバック、当日の授業のスケジュール
- ②45分 通常講義
- ③25分 クリティカル・シンキング・ワーキング・シート配布、書く、集める、シャッフル、配布、書く、集める、シャッフル、配布、書く の繰り返し
- ④10分 クリティカル・シンキングの課題に関する自分の意見をミニット・ペーパーに書き、出来上がったクリティカル・シンキング・シートと一緒に提出

さて、この2018年度は次のようなテーマで、クリティカル・シンキングを行った。

①学部4年のA君は配属された研究室の教授から頼まれて、大教室でアクティブ・ラーニングのアシスタントをすることになった。授業は大教室で200名も来ている。教授は、「キミは優秀でこれから研究者になるのだから、これくらいの手伝いをしておかないと将来、授業運営ができないぞ」と言っている。しかし、大学院生がTAとしてアルバイト料を貰って同じような仕事をしているのに、自分が「ボランティア」扱いであるのはおかしいな、とA君は思っている。もちろん仕送りが少ないので、A君はお金があればあったほうがいい。

⁶ 『東京新聞』2015年10月11日

A君は教授に「アルバイトではないのですか」、と訊いたが、「予算ないから」といわれた。A君はどうすればいいとあなたは思うか？

解説:①は学生が直面するであろう、教員との非対称の権力関係とアルバイト/ボランティアの問題である。このクリティカル・シンキングは、ミシェル・フーコーの「生権力」「規律権力」や、エティエンヌ・ド・ラ・ボエシの「自発的隷従論」を扱った講義のあとに行った。この授業の最初では、各出身高校の校則の違いはなぜあるのだろうか、とか、遅刻をしてはいけない、と考え、学生が規律正しく行動する態度はどこから来ているのかについてグループで話し合った。この①の課題は、菊池のいうクリティカル・シンキングに適している課題のうち、「合理性」「規範」に相当するものである。

②日本の選挙の投票率が低い。特に、若者（20～24歳）の投票率は昨年（2017年）の衆議院選挙で34%と、約3人に1人しか投票に行っていない。投票率が低いと、固定票を持つ党が支持率が低くても勝ってしまう。若者が投票に行かない理由はいろいろあるだろうが、投票にいてもメリットを感じない、誰に入れたらいいのかわからない、周りが投票に行かない、めんどろ、政治不信、誰に入れても同じ、政治に無関心、政治の話を友人とするなんてダサい、棄権しても罰則なし、政治は誰かにお任せ、等々であろう。しかし、政治は予算を決めたり、新しい法律をつくったり、憲法を変える発議をしたりと、国民の生活にはおおいに関係がある。大学でいえば、国立大学の予算を徐々に削減する国立大学法人化も法律で決められた。投票率を上げるために色々な方策がある。オーストラリアは、投票率が90%を越えている。理由は、義務制だからで、正当な理由なく投票しなかった有権者に対する罰金は20豪ドル（およそ2000円）にのぼる。では、日本で投票率を上げるためには、どうすればいいのか？それとも、上げなくてもいいのか？

解説:②は、若者の政治的無関心と投票率の低さの問題についてである。このテーマは、ハンナ・アーレントがナチの戦犯アイヒマン裁判を傍聴した後で指摘した「悪の陳腐さ（凡庸さ）」、「没思考性」を授業で紹介した後に課した課題である。その授業の講義では、特に、国立大学学費の高騰や仕送りの少なさで悩む学生が多い中、高騰の原因を作った国立大学法人化も国会での議決を得て法制化したものであったことを指摘した。ついで、政治的無関心は結局自分たちの首を絞めることになりかねない、「没思考性」は、ファシズムにつながり、人間の自由を制限することにもつながるという警鐘を鳴らす内容を持っていた。これは、菊池のいうクリティカル・シンキングに適しているとされる課題のうち、「知」「合理性」「規範」に相当する。

③日本の大卒女性の就業率は国際的にみても低い。OECD（経済協力開発機構）の国際学力調査「PISA2012」では、15歳の生徒に母親の就業状態を尋ねている。大学・大学院卒の母親に限ると、フルタイム就業が40.7%、パートタイム就業が35.3%、求職中が2.3%、専業主婦が21.7%、という分布だ（日本）。これに対してスウェーデンでは、フルタイム就業が75.6%と多くを占める。ここに、出産、子育てが、女性のキャリア形成に影響を落としていることを見て取ることができる。日本の女性の社会進出は「中東なみ」のレベルである。だから、子どもをもつと不経済で非効率的だから子どもを生まない、という考えがある。実際に、いま一番経済的にも精神的にも厳しい状況にあるのは低賃金で働くシングルマザーである。それに対して、子どもを生まずキャリアを続けた女性は、経済的にも男性と同等で、社会的地位が高い傾向がある、というデータがある。子どもを産み、育てるのは非効率というこの見方をあなたはどうか考えるのか？

解説:③は、少子高齢化と「子育て」非効率論についてである。究極の経済効率化の過程としてのグローバルイゼーション、QOLとSPECについて話題にした後に、男女がともに働くという社会で、多大な労力と出費を伴う子育てについて問うた。非効率という経済学や、功利主義の用語で出産と育児を捉えることができるのか否か、というこのような命題は従来の哲学ではほとんど取り上げられなかった。なぜならば、いわゆる

ケア役割を担うのは女性に限定されるという社会の中で、意思決定権を持ち続けてきたのは、ケア役割から「自由」であった男性であったからである。また、その文脈で職業的哲学者のほとんどが男性か子どものいない女性であった、という事実もこれを裏付けする。これは、菊池のいうクリティカル・シンキングに適している課題のうち、「知」「合理性」「多様性」「規範」「苦楽」に相当する。

2.2 学生の反応

これらの質問は、教員である筆者が考え、学生に投げかけたものであった。また、教員は「ファシリテーター」すなわち、スムーズな議論を促す人に徹した。学生の意見に基本的に否定的な態度はとらないのが鉄則である。課題は概ね高校を卒業してすぐか数年の若い学生の生活や将来に直結しており、いずれも関心の高いテーマとなった。本論では、紙幅の関係で、①の設問にのみ例を挙げて説明してみよう。

クリティカル・シンキングのワーキング・シートでは左上に課題がある。それに対して、左下欄に最初の人自分の意見を匿名で書く。その次にシートを一度集めて、ばらばらにして混ぜ再度学生に送り、右上欄に二人目が匿名で前の人意見を受けて意見を書く。その次に再び集め、シャッフルし、学生にまた送り、最後に匿名で前者二名の意見を見ながら自分の見解をまとめる、という手順である。

たとえば、次のような例がある。

哲学の基本:critical thinking (批判的思考)

<p>例)学部4年のA君は配属された研究室の教授から頼まれて、大教室でアクティブラーニングのアシスタントをすることになった。授業は大教室で200名も来ている。教授は、「キミは優秀でこれから研究者になるのだから、これからの手配はしておかないと将来、授業運営ができていない」と言っている。しかし、大学院生がTAとしてアルバイト料を貰って同じような仕事をしているのに、自分がボランティア扱いであるのはおかしいな、とA君は思っている。もちろん待遇が少ないので、A君はお金はあればあったほうが良い。A君は教授にアルバイトではないですか、と聞いたが、「卒業しないから」といわれた。あなたはA君はどうすればいいと思うか?</p>	<p>(ペンネーム 2) 鉄平 あかさたさんの意見はいいと思う。自分が自分と同じ立場としてアルバイト料を貰っているのに自分より少ないのは納得がいかないと思う。</p>
<p>(ペンネーム 1) あかさた A君は、社会学の教授以外の数人の教授に相談をし、その意見を参考に考えるのが良いと思う。もし、A君自身が卒業後、良いと認めるアルバイト料を貰うことが出来れば、良いと思う。</p>	<p>(ペンネーム 3) ナナハチ あかさたさんの数人の教授に相談をして、いい意見は、結果に参考とするといい感じかして、大変良いと思いました。しかし、実際の教授の意見は変わらないので、ジレンマを抱えたままになる可能性が高いと思いました。</p>

図 1

左下欄 (あかさたな) : A 君は研究室の教授以外の数人の教授に相談をし、その意見を参考に考えるが良いと思う。もし A 君自身がそれでも良いと思ったら、アシスタントを受けても良いし、良くなかったら断るべきと思う。

右上欄 (鉄平) : あかさたさんの意見はいいと思う。確かに、(大学院生が)自分と同じ TA としてアルバイト料を貰っているのに、自分が貰っていないのは納得がいかないと思う。

右下欄 (ナナハチ) : あかさたさんの「数人の教授に相談をする」という意見は慎重に物事を考えられている感じがして大変良いと思いました。しかし、実の教授の意見は変わらないので、ジレンマを抱えたままになる可能性が高いと思いました。

哲学の基本:critical thinking (批判的思考)

<p>例)学部4年のA君は配属された研究室の教授から頼まれて、大教室でアクティブラーニングのアシスタントをすることになった。授業は大教室で200名も来ている。教授は、「キミは優秀でこれから研究者になるのだから、これからの手配はしておかないと将来、授業運営ができていない」と言っている。しかし、大学院生がTAとしてアルバイト料を貰って同じような仕事をしているのに、自分が「ボランティア」扱いであるのはおかしいな、とA君は思っている。もちろん待遇が少ないので、A君はお金はあればあったほうが良い。A君は教授にアルバイトではないですか、と聞いたが、「卒業しないから」といわれた。あなたはA君はどうすればいいと思うか?</p>	<p>(ペンネーム 2) スネ夫 TAである大学院生は卒業研究もすでに完成させており、経験もA君以上に重ねてきている。A君はまだTAとしての活動に慣れていないのではないかと推測され、アルバイト料を貰ったとして「金銭分の働き」ができるかどうかは疑問が残る。まずはボランティアとして参加し、先輩のやり方をしっかり勉強していく方がいいのではないだろうか?</p>
<p>(ペンネーム 1) スネ夫 TAである大学院生は卒業研究もすでに完成させており、経験もA君以上に重ねてきている。A君はまだTAとしての活動に慣れていないのではないかと推測され、アルバイト料を貰ったとして「金銭分の働き」ができるかどうかは疑問が残る。まずはボランティアとして参加し、先輩のやり方をしっかり勉強していく方がいいのではないだろうか?</p>	<p>(ペンネーム 3) KKK 「まずボランティアとして参加」とあるが、A君がアルバイトとして働かせてくれと言ったわけではなく、教授がA君に頼んでいるのだから、その対価は払うべきだと思う。ボランティアとは自発的に行うべきものであり、人に言われてするものではない。だから、教授がボランティアとしてやってくれと言うのは、単なるブラック会社のそれと同じであると思う。</p>

図 2

左下欄 (スネ夫) : TA である大学院生は卒業研究もすでに完成させており、経験も A 君以上に重ねてきている。A 君はまだ TA としての活動に慣れていないのではないかと推測され、アルバイト料を貰ったとして「金銭分の働き」ができるかどうかは疑問が残る。まずはボランティアとして参加し、先輩のやり方をしっかり勉強していく方がいいのではないだろうか?

右上欄 (火事です火事です火事です) : そうですかね? 大学院生と学部 4 年生に(ママ)技術はそこまで変わらないので、4 年生にもアシスタントするならばお金はもらえるようにしたほうが良いと思います。

右下欄 (KKK) : 「まずボランティアとして参加」とあるが、A 君がアルバイトとして働かせてくれと言ったわけではなく、教授が A 君に頼んでいるのだから、その対価は払うべきだと思う。ボランティアとは自発的に行うべきものであり、人に言われてするものではない。だから、教授がボランティアとしてやってくれと言うのは、単なるブラック会社のそれと同じであると思う。

図 1 の例は、最初の意見に同調する傾向があるグループの例である。あるいは、もともとたまたま同じよ

うな意見をもっていた可能性もある。逆に図2の例では、最初の意見に異論をぶつけるグループの例である。

また、紙面の関係で割愛するが、最初の人「乗り」が悪いと、最後まで議論が進まず、各人一行程度しか書かない、という例も見受けられた。これは、議論が匿名であるので、自分のパフォーマンスを誰にも評価されないことにつけ込んだ例である。

1クラス120人以上学生が出席しているのにTAがいない。それゆえ、一人ひとりの学生には目が届かず、ワーキング・シートの配布と回収にかなり時間がかかり、執筆に十分な時間が取れない学生がいたことは残念であった。特に、教室の後ろのほうの学生にシートが行き渡るのが遅れたのは遺憾であった。まさに、この①の課題が提示するTA問題が起きやすいクラス編成であった。

3 学生の感想

3.1 意見を変える学生たち

授業の最後に、学生の最終的な意見を書いてもらう時間をとっている。その中で、クリティカル・シンキングのワーキング・シートを書きながら「意見が変わった」という学生も複数いるので、その意見をいくつか提示してみよう。

Hさん：私はこの問題に関して最初は「参加すべきではない」と否定的な意見を持っていた。しかし最終的には「参加すべきである」という肯定的な意見に変わった。その理由として、私のみた回答がすべて肯定的な意見のものであったから。その回答に流されてしまったということも考えられるが、その肯定的意見の理由に納得したから、という点大きい。つまり、クリティカル・シンキングは私の観点だけでなく、他の人の観点を参照して自分の意見を述べるができるため、純粋に視野の広い考え方ができる、という点と、明確には存在しない「正解」に一番近い回答をすることが望めるという点がメリットであると考えられる。

Kさん：本日、はじめてクリティカル・シンキングをやりました。体験していて、人の色々な意見や考え方を知ることができて良い体験をしました。自分の意見だけが全てではないのだと改めて体感しました。

Nさん：内容的に非常に悩ましい案件で困惑しました。しかし、このプリントは新しい形式であるので、新鮮で、論理的思考力が鍛えられるのだと感じました。他の人の意見を読んで、納得し、最初は「絶対受けるべきでない」と思っていたことが揺らぎました。

Yさん：最初は自分の利益のないことは進んでしないで、利益がある物事を見極めることが大切と考えていました。でも、クリティカル・シンキングには、ボランティアでも、将来優秀な研究者、職に就くには、教授に良い顔をして推薦されるくらいにならないと今の時代生きていけない、という意見がありました。ただ自分に不利益であると決め付けて避けるのではなく、将来的なことも考え、うまく利用することも大切だと思った。

Iさん：最初に書いた自分の意見は、きちんと理由づけもあり、人に理解される内容だと思っていたが、他の人の意見を読んだり、批判したりすることで、より自分の主張に対する裏づけは深くできた。また、新しい考え方を見ることで、自分の意見が少し変わった部分もあった。自分の中にはない考えを読むことで、新しい考えを取り入れて、自分の考えの豊かさの成長にも繋がると思った。

自分の考えを変えることは妥協ではない。対話を通して、自身を見つめなおし、成長をもくろむ試みの仕掛けをつくることは授業の工夫として大事であろう。このクリティカル・シンキングを取り入れる前は、筆者は、学生にスマートフォンで意見を入力してもらってスクリーンで見せる、ということではできると試行錯誤したことがある。しかし、SNS利用にしてもTwitterでは教室の外に出てしまうし、Facebookは根本実名登録なので、これも難しい。LINEにすると匿名性が担保できない。行き着いた先が、匿名での手書き回覧であった。

手書きにはメリットとデメリットがある。デメリットには、書くのが遅くなる、漢字の間違いが出やすい、悪筆が読みづらい、等がある。一方、メリットは、じっくり考える、デジタルよりもかえって個人が特定され

にくく、外部に情報が流れない、という点、そしてコピー・アンド・ペイストができない点がある。あと、他の学生が一斉に手書きで書く中、モバイルで別のことをしにくい、授業の課題に集中させやすい、というメリットもある。

3.2 学生は「TA ボランティア」についてどう考えたのか？

この①の課題を出した授業の前半では、日本社会の集団主義と、特に男性自殺率の高さ（ちなみに、クラスの88%が男性）、さらに、権威や規範に無意識に従ってしまうことの問題点をも扱った。その授業の最後におけるクリティカル・シンキング・シートの回覧であった。従って、学生の中に権力に無意識に従ってしまうことに対する警戒感は醸成されている中での課題であった。ここで①を「TA ボランティア」をすべきか、という課題と規定してみたい。この課題には伏線がある。

2015年あたりから、国立大学の経費削減が本格化している。それと同時に、アクティブ・ラーニングが推奨されてきたため、授業を円滑に行うために大学院生を中心としてティーチング・アシスタント（TA）を雇うようになった。しかし、予算は限られているので、すべてのTAの予算獲得の要求が通るとも限らない。それゆえ、このような学部生のTAボランティアは十分に考えられる案件である。

授業の最後に学生にまとめて書いてもらうミニット・ペーパー（記名つき）にこのTAボランティアを受けるか否か、について自分の意見を書いてもらった。その内容をまとめたものが以下の通りである。「やるべき」は28%、「やってはいけない」が27%、その他は45%で、学生が態度を決めかねる難しい案件であることがわかった。（表1）（図3）

TA ボランティアを	数
やるべき	48
やってはいけない	45
その他	75

表 1

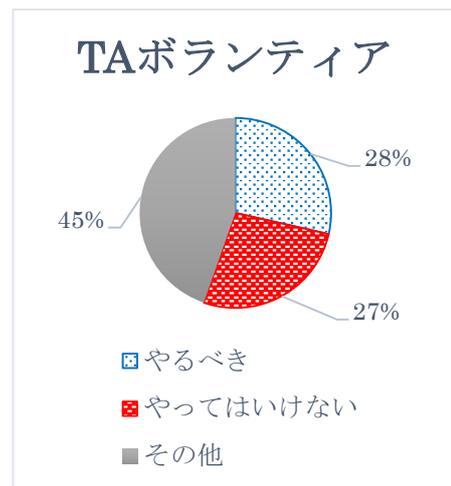


図 3

その内訳は以下のとおりである（表2）（図4）。

やる理由	数
経験	33
教授との関係	27
お金以外もらう	2

表 2

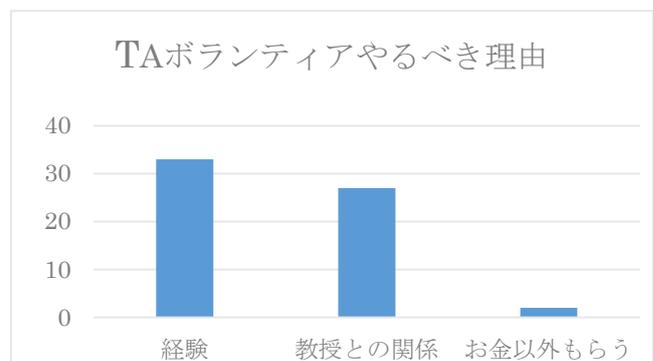


図 4

「TA ボランティア」に関して、経験を積むと将来に役立つから、お金だけを求めるのはよくない、という意見や、教授とは長い付き合いになるので、人間関係を壊すべきでないという「付度」をする意見、さらには、教授に気に入られることで、未来が開けるはず、という意見もこの中には含まれる。

一方、やめるべき、という意見には次のような内訳があった（複数回答を総数として換算）。その中には、授業中で講じたように、「非対称の権力関係の中で、地位が高いものにやみくもに隷従してはいけない」、「負の連鎖」を防ぐべし、「これはハラスメントだ」、「他の教育関係のアルバイトをしたほうがいい」といったような意見が大勢を占めた（表3）（図5）。

TA ボランティアやらない理由	数
断る権利	24
理不尽	8
負の連鎖	7
他のバイト	7
事務に相談	7
ハラスメント	5
院生になってから	3

表 3

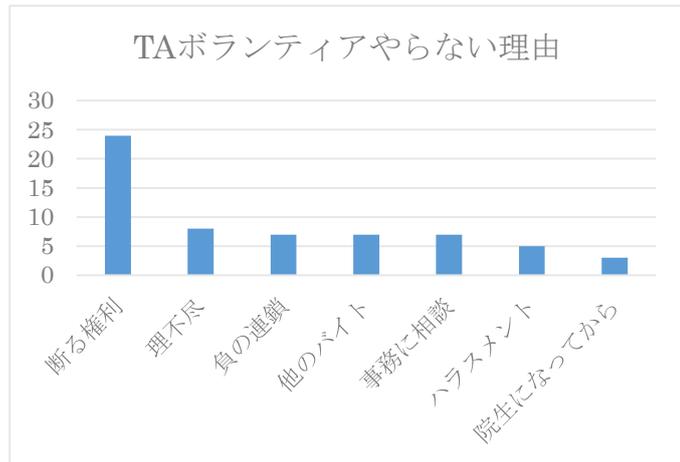


図 5

また 45%をしめた「どちらともいえない、わからない」という立場のものでは、「教授との人間関係の度合いや、自分のモチベーション、自分の将来の本当の希望ともかかわる問題だから」という「場合による」という意見が多くを占めた。また、「あくまでも交渉してアルバイトにしてもらおう」という意見もあった（表4）（図6）。

その他	その他の内容
場合による	26
アルバイトにしてもらおう	18
文句言われず不安	8
事務と相談	4
慎重さ	4
抵抗	3
教授との関係による	3
TAと不平等	2
回数少なければ	1
時間あれば	1
自己責任	1
あいまいでわからない	3

表 4

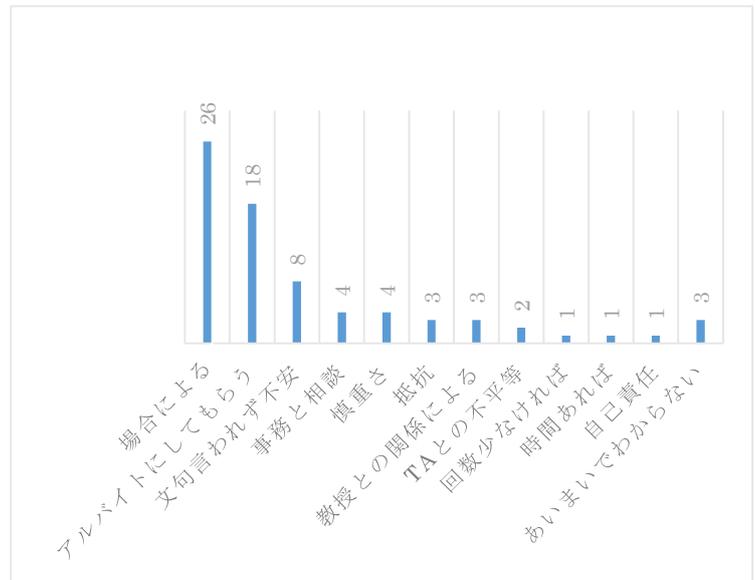


図 6

3.3 学生アンケートの結果

さて、7回の授業のうち、クリティカル・シンキングを3回実施した。7回目の週（2018年11月19日）に、124名（登録者126名）にアンケートをとった。内容は、以下の通りである。

問い1：クリティカル・シンキングをやってみてどうでしたか（複数回答可）

- ①自分の考えをまとめるのが難しかった
- ②時間が足りなかった
- ③他の人が真面目に答えていない場合、どのようにすればいいのかわからなかった
- ④匿名はやめたほうがいい
- ⑤このような訓練は受けていないので、他の人の意見がわかってよかった
- ⑥アメリカの大学のように、個人で意見をだすようにすればいい
- ⑦グループワークで、チームとして意見を出したほうがいい
- ⑧自分の意見をまとめるのに、有効な方法である
- ⑨まとめた結果を、公開してほしい
- ⑩またやってみたい
- ⑪その他

その結果は以下の通りである（表5）（図7）。

問題	人数	割合(%)
1	61	49
2	64	51.6
3	36	29
4	4	3.2
5	47	38
6	7	5.6
7	6	4.8
8	42	33.8
9	22	17.7
10	22	17.7

表5

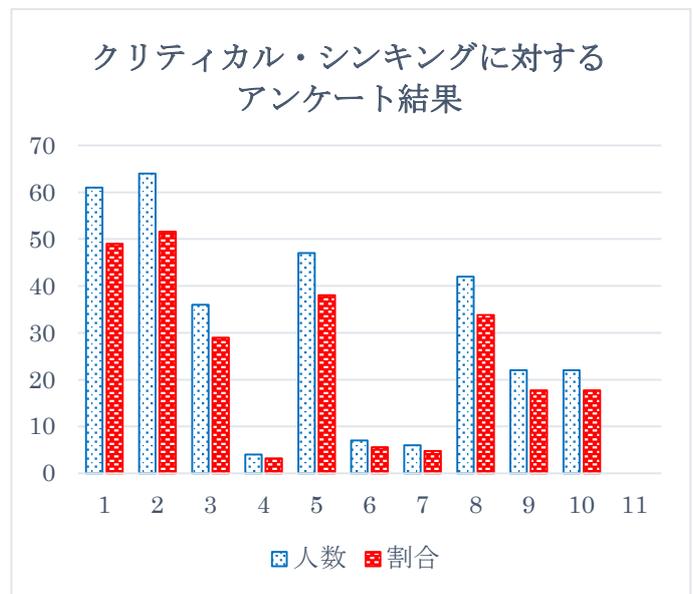


図7

おおむね、次のような平均的學生像が浮き彫りになるであろう。

どれも答えが一つというわけではなく、また自分とも将来かかわる可能性のある難しい問題なので短時間では自分の考えをまとめるのは難しい。しかし、はじめて経験した匿名の他者との真面目な対話には新鮮な驚きをもってまじめに取り組み、おおむね好感を持っている。しかし、時間が足りず、また、不真面目回答が出てきた場合、どうしたらよいか、わからない。だからこそ、ある学生は次のようにミニット・ペーパーに書いてきた。「だから、文系って嫌いなんです。答えが沢山あって、あいまいで、正解がないから。」しかし、正解がないのも人生であり、仕事である。だからこそ、最適解を求めるプロセスを他者の意見を取りいれ

つつ体験したことは、難問に当たったときのシミュレーションであったともいえる。このプロセスに肯定的な評価をしたものは3分の1いるということもわかった。

問い2：来年度（2019年）の改組で、「哲学入門A」はなくなります。来年からほとんどクリティカル・シンキングを行うことができません。これについて、どう考えますか

- ①どんな形であれ、行うべきである
- ②こんな面倒なことはしなくてもよい
- ③どちらでもよい
- ④別な形で論議できればいい。

このアンケートの結果は以下の(表6)、(図8)である。

問題番号	人数	割合(%)
1	34	27
2	12	9.6
3	33	26.6
4	43	34.6

表6

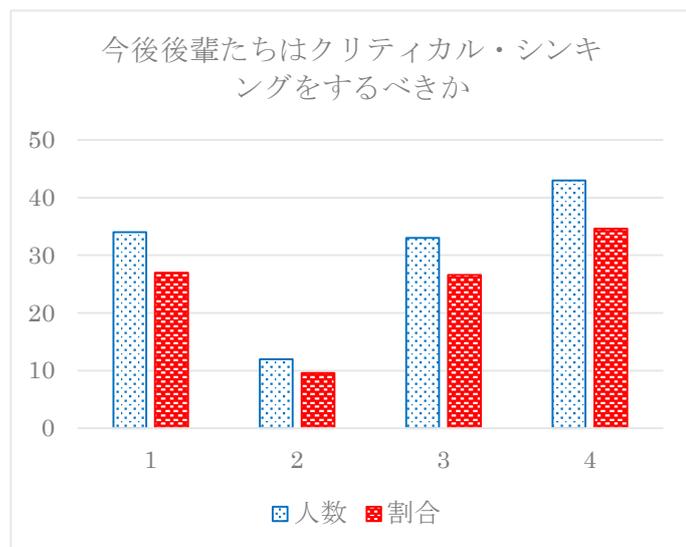


図8

哲学の基本である「考える」「対話する」「もう一度考えて意見をまとめる」というアクティビティを授業内で行うクリティカル・シンキングに否定的な意見を持っている学生は9.6%と少数派である。少なくとも、1問と4問あわせて61.6%が他者と「議論を重ねる」ということを肯定的に捉えているということがわかった。

結語

クリティカル・シンキングのワーキング・シートを使った「哲学入門A」の授業の例を本論では紹介した。本方式の特徴は、まず教員が知識を伝授する人となるのではなく、「ファシリテーター」すなわち、スムーズな議論を促す人に徹するという点である。その意味で、学生の意見に基本的に否定的な態度はとらない。また、実際のこの方式の利点は以下のとおりである。

第一に、大規模教室・大型授業というデメリットをメリットに変える、という点である。大人数の教室で、なおかつ固定椅子、固定机となると、アクティブ・ラーニングは非常に難しくなるというデメリットがある。グループを作るにしても、体の向きがこのような固定椅子では不自然にならざるを得ないので、なかなか会話ははずまない傾向がある。そんな中でのワーキング・シート上の対話は、机があるがゆえに可能であるというメリットが生じる。また、口に出して意見を言うことが不得手な学生（いわゆる、コミュニケーションが苦手な学生）であっても匿名なので、気軽に自分の考えを披露することができる。全員が、ほぼ強制的に参加を求められるので、少なくとも寝てられない。

第二に、哲学の基本である思考と対話を具体的に体験できることである。少なくとも、大学センター試験の「倫理」のように、人名やその思想内容を覚えて、たった一つのクイズ的な問いに正解して加点を狙うということとは根本的に異なる、ということがわかればこの試みは半分以上成功したことになる。

一方、デメリットもまた、匿名の部分に起因する。一行しか書かなかったり、ごく少数であるが、禁止しているにもかかわらず他者の人格を否定するような書き込みをしたりするものもある。また、学生に結果の閲覧をすることができなかった。人手と時間があれば、学内の Moodle にアップする、ということも考慮すべきであった。また、記述する時間が足りなかったという意見も多く、これについては、講義の内容を減らしてでも十分な時間を充てるべきであったのか、教師として自問させられる。

最後に、もう一つの利点を述べたい。本学の学生は高校時代から「理系」カテゴリーに分類され、歴史や倫理を十分に学んでこなかったものが多い。そんな彼らにとって、このクリティカル・シンキング・ワーキング・シートを導入したアクティブ・ラーニングの方式は、文系・理系の垣根を越えた「学際的学び」「人間についての学び」「社会についての学び」のスタート・ポイントとなっている。本論で例として取り上げた「研究室での教授との付き合い」、別の課題として取り上げた「選挙投票行動」の問題は、権力をどう考えるのか、どう付き合うのか、という哲学的考察と密接に関係している。また、刺激的な「子育て非効率論」は、年少期と老年期にケアを必ず必要とする人間存在をどう考えるのか、社会の成員としてどうケアに向き合うのか、人間と「効率性」の関連性をどう考えるのか、という根源的な問題とも関連する。少子高齢化時代に社会に出ていく学生たちが、このような「シリアス」な問いについて考え、次に別の「問い」を自ら発し、他者とともに考える習慣をつけることで、学生の知的活動が活性化し、ネットワーク化していくことを筆者は共通科目担当教員として望んでやまない。それによって、「イノベーション」を成し遂げることができる人間に学生が成長すると信じるからである。

リファレンス

- (1) 伊勢田哲治, 哲学思考トレーニング, 2005, ちくま新書.
- (2) 伊勢田哲治, 戸田山和久, 調麻佐志, 村上佑子編. 科学技術をよく考える, 2013 名古屋大学出版会.
- (3) 猪原敬介, 上田紋佳, 塩谷京子, 小山内秀和, 複数の読書量推定指標と語彙力・文章理解力との関係:—日本人小学校児童への横断的調査による検討—, 教育心理学研究, 63(3), 2015.
- (4) 隠岐さや香, 文系と理系はなぜ分かれたのか, 2018, 星海社.
- (5) 亀倉正彦, “二重化する学習目的と多様化”, アクティブラーニング批判的入門, 中岡篤典, 谷口裕稔, ナカニシヤ出版, 2018.
- (6) 菊池建至, クリティカルシンキング入門は、何をすることなのか(1), 金沢医科大学教養論文集, Vol.48, 2016.
- (7) 菊池建至, 紙上対話や学生どうしのコメントを生かすクリティカルシンキング入門, 哲学, 69, 2018, p76-89.
- (8) 豊永耕平, “大学教育が現職で役立っていると感じるのは誰か”, 文系教育は仕事の役に立つのか—職業的レリパレンスの検討, 本田由紀, ナカニシヤ出版, 2018.
- (9) E.B.ゼックミスタ, J.E.ジョンソン編. クリティカルシンキング 入門篇, 1996, 北大路書房.